

第34号(2024年夏号)
発行日 2024年8月26日
信州大学教職支援センター

Shinshu University
Center for the Teaching Profession

教職支援センター ニュースレター

巻頭言

【教育実習と教員採用試験】

夏を迎えるこの時期(本稿を執筆している6月)は、教育実習と教員採用試験がピークを迎えている。今年もおおむね無事に、教育実習を終えることができている。実習を終えた学生たちは目を輝かせながら「授業の準備は大変だったけど、毎日が楽しかった」「生徒とたくさん関わって、とてもよかった」「こんな手紙までもらったんです、うれしかった」などと報告してくれる。また、「実習前には考えていなかったけど、教員になろうかと揺れてきた」「大学院には行こうと思うけど、その2年間で教員になろうか検討してみる」と、教職に就く魅力を感じる学生も出てきている。

実習を受け入れていただいた学校の先生方が、時間を割いて熱心にご指導いただいたことも話の端々から伝わってくる。このような実習校の先生方の関わりも揺れ動く要因になっているのだろう。

私もかつて、教育実習を毎年受け入れる学校に勤めていたことがあった。研究校で結構きついことが多く、決して楽しいとはいえない3年間であったが、この3年間で一番充実していたのは、教育実習を受け入れているときであり、やりがいを感じるひとときであった。数週間というわずかな期間であるが、受け持った学生は、私のつたない指導でも、打てば打つほど響いていき、実習が終わるころになると、一人前の授業を行えるようになっていった。あれから20年近く経ち、教員になった「教え子」が学校の研究主任や教育委員会の指導主事となり、ミドルリーダーとして活躍している話をちらほら聞くと、うれしい気持ちになってくる。

一方、教員採用試験は過渡期を迎えている。発端は文部科学省が打ち出した日程の前倒し要請だが、全国で教員採用試験を早める動きが出ている中、長野県教育委員会は今年度、日程を早めなかった。私は、早めなかった要因に学校の事情も絡んでいるのではないかと思っている。例えば、中学校では中体連の地区大会(県予選)が毎年第4土日を中心会期として行っている。この土日だけでおさまらず第2土日、第3土日にも大会を行う競技が多数である。また、小学校では猛暑の影響などで運動会は秋からこの時期に移行した学校が大半で、5月最終土日か6月第1土日に集中している。もし、これらの時期に教員採用試験の日程を組むと、臨時的任用で学校に勤めていながら受験する者は、運動会や大会を欠席して試験を受けなければいけない。また、教育実習は5月中旬から6月中旬に行う学校が多く、前倒しをすると実習期間中に採用試験を迎える学生も出てきてしまう。前倒しをした方が受験生が減ってしまう可能性もあり得る。学校現場のことを考えれば考えるほど現在よりもふさわしい日程はなかなか簡単に見つからない。今後も、試験日程については、注視していきたい。

株式会社リクルートが2022年にZ世代(26歳以下)に行った就業意識に関する調査によると、「現在在籍する会社で10年以上働きたい」と回答した者が39.9%にとどまった。また、本学のある授業で教職全般に関して質問を受け付けたときも「転職してそれから教員になることは可能か」ということをどの学部でも聞かれた。大学卒業とともに教職に就かずとも、後に就くことを選択肢の一つに考えている者が増えているのではないか。そのようなことも踏まえながら、日々の授業に努めていきたい。



藤井 善章(教職支援センター 副センター長)

シリーズ 活躍する卒業生

教職支援センターの前身の教職教育部が発足して10年以上が経ち、多くの卒業生が教育現場で活躍しています。ここでは、卒業生の活躍を紹介します。

～ 工 学 部 編 ～



長野県長野工業高等学校 教諭

一ノ瀬 拓巳 先生

工学部電子情報システム工学科 令和元年度卒業



大学を卒業し、最初は臨時採用の実習助手として1年間、翌年から教諭となり、今年で教員生活も5年目に突入し、3学年の担任をしています。私は昔から友人に勉強を教えることが好きで、高校生の時、いつも勉強を教えていた友人から、「おかげさまでテストの点数があがったよ！ありがとう！」と言われ、とても嬉しかったことを今でも鮮明に覚えています。この出来事が「教員になりたい！」と強く思うようになったきっかけです。そして、工業高校出身であったため、工業科の教員になりました。

工業という科目は、機械・電気・情報等のすべてを包括しているので、必ずしも自分の専門分野の科に配属されるとは限りません。私の専門は電子情報系なのですが、現在は機械科に配属されています。正直、自分が機械科に配属になると聞いた時には不安でした。しかし、先生方からのサポートもあり、今では1人で実習科目を持つこともできるようになりました。

機械科では「旋盤」と呼ばれる工作機械を用いた実習を行っており、これは扱い方を間違えると大きな事故につながるものなので、最初は自信をもって指導することが出来ませんでした。これではいけないと思い、昨年度に自分のクラスの生徒と共に、「技能検定 旋盤3級」を受け、合格することで自信をもって指導をすることが出来るようになりました。

最後になりますが、教員として働いていて、大切なことは自分1人で頑張りすぎないことだと感じています。「チーム学校」という言葉があるように、何か問題があったときや自分だけでは片づけられない仕事も、周りの先生方に頼り、1人で抱え込まないようにしています。また、教員の仕事は様々な場面でやりがいを感じることが出来ます。実習で教えた技術を生徒が使いこなす場面や、OBが訪ねてきて高校生活で学んだことが生かされていると話を聞いた時は特にやりがいを感じました。これからも生徒と共に学び、成長しながら頑張っていきたいと思っています。





長野県駒ヶ根工業高等学校 教諭

林 良和 先生

総合理工学研究科(工学専攻) 令和4年度修了



一昨年信州大学大学院を修了し、高校の教員生活を送り始めてから2年目となりました。これまでの教員生活を経ての近況報告をしたいと思います。

まず1年目の昨年は、初任ということもあり、担当した校務分掌は3学年のクラスの副担、生徒会、ソフトテニス部顧問でした。副担の業務の中では、3年生は進路の真っ盛りという時期なので、面接指導や志望理由書の添削、さらに地元企業への挨拶等を行いました。生徒会の業務の中では、3年生が中心となっている生徒会執行部の指導を行いました。特に忙しかったのは文化祭の時期で、私の担当していた委員会は文化祭のオープニングムービーとエンディングムービーの製作を行いました。生徒はより良い動画を作ろうと試行錯誤しており夜遅い時間まで製作を行っていました。生徒が真剣に取り組み、文化祭を大成功させた姿は非常に感動的でした。

ソフトテニス部の顧問は専門外のスポーツということもあり苦悩もありました。技術面に関して少しでも指導ができるようになるよう、自らも一緒にプレーをし、技術を高めている現状です。私が赴任した当初の3年生は目標である団体戦県大会出場を果たせませんでした。その下の学年の最後の高校総体では、悲願の団体戦県大会出場を果たすことができました。県大会出場権利の残り1枠をかけた勝負において、先輩たちの熱心な応援もあり、勝利を収めることができました。今までの生徒の努力が報われた瞬間であったので非常に嬉しく感じました。



2年目に入り現在は1年生の担任をしています。入学式や、4月末にあった授業参観並びに学年学級PTAはとても気を使いましたし、精一杯取り組みました。「入学式は学年の指導方針を保護者や生徒に示す機会だからめっちゃくちゃ重要だよ。」と学年主任から助言をいただき、その通りだと感じていたので、自分が伝えるべきと思う内容をきちんと話せて良かったと感じています。

以上がこれまでの近況報告です。指導することに手のかかる生徒も多いですが、生徒の頑張りや成長が感じられることに魅力がある仕事だと思います。

教職支援センター5～8月の動き

- 松本市教委訪問(4/30) ○朝日村未来塾開講式(5/11) ○生坂村未来塾開講式(5/20)
- 山形村未来塾開講式(5/25) ○小川村未来塾開講式(5/25)
- 長野県総合教育センターとの連絡協議会(5/23) ○第1回教職支援センター拡大打合せ(5/29)
- CST養成プログラム実施委員会(6/11) ○第1回教職支援センター運営委員会(7/10)
- 筑北村未来塾開講式(7/23) ○学芸員養成課程実施分科会(7/24)
- 教職事務担当者勉強会(8/28)



地域連携パートナーからのメッセージ



学び合える環境

松本美須々ヶ丘高等学校
教頭 半田 貴大 先生

「教員はブラックな職業」と言われる中で、果たして何人の学生が集まるのだろうか。そんな心配をしながら信州大学の地域連携事業である本校の学習支援業務の説明会に向かいました。

よくて20人、最大でも30人と見込んで資料を用意していくと、会場には約50名の学生さんが…驚きと喜びと資料が足りないという焦りと、様々な思いが頭の中を駆け巡りました。説明会では、教員という仕事について私が思うやりがいや楽しさを伝えさせてもらいました。

実際に応募してくれた学生さんは、私が担当した昨年度と今年度ともに20名程度で、すべての学生さんと面接をさせていただきましたが、自分の知識や経験を伝えたいと話してくれる方や、先生という職業に就くにあって高校生と関わることでできる貴重な機会だと話してくれる方など、みなさんとても前向きで、非常に頼もしく感じました。

今年度最初の学習支援の際、どんな生徒がいるのか、どんな質問をされるのか、自分はしっかり質問に答えられるのか等、様々な思いもあって学生のみなさんは少し緊張していたように感じました。学習支援が終わり、戻ってきた学生さんの多くは「楽しかったです」と笑顔で言ってくれました。そのような学生のみなさんの様子から本校生徒も楽しく前向きに勉強できたのだろうと感じました。実際に信大生と勉強した生徒はみんな、期間中ずっと学校に残って意欲的に学習するとともに積極的に質問しながら主体的に勉強していたようです。

今は生徒が質問するのは主に勉強のことだと思いますが、いずれ勉強方法のこと、進路をどうやって決めたのか、いつごろ進路決めたのか、どうしてその学問を深めたいと思ったのか等、質問してくれることを期待しています。そのような質問をされたときに、学生のみなさんが質問されたことに単純に答えるのではなく、なぜその生徒はそのような質問をしたのか、生徒はどんな返事を期待しているのか、生徒が前向きになるためにどのような返答をすることが望ましいのか等を考えることは、先生という職業に就くにあってとても勉強になると思います。また、自分の過去を振り返ることによって、自分の未来を考える機会にもなるのではないかと思います。

本校としても、生徒と学生が勉強だけでなく、自分自身のこと、自分以外の人のこと、様々なことをお互いに学び合える環境を整えられるよう努力してまいります。今後とも貴センターと本校との連携がより一層深まりますようよろしくお願い申し上げます。



編集後記

教職人気の低迷が続く中、多くの学生は、「教職は進路選択の1つ」という位置づけで教職課程の履修に進んできます。しかし、前期の講義を受け、「教職の勉強がとても面白い」「教師の仕事のイメージが変わった」と、興味を持つ者が増えてきた手ごたえを感じています。決して楽な仕事ではありませんが、教職の魅力をしっかり伝えていきたいです。（広報担当 横嶋敬行）



■〒390-8621 長野県松本市旭3-1-1 ■TEL: 0263-37-3367 ■MAIL: kyousho@shinshu-u.ac.jp
■URL: <https://kyoushoku.shinshu-u.ac.jp/kyoushoku/>